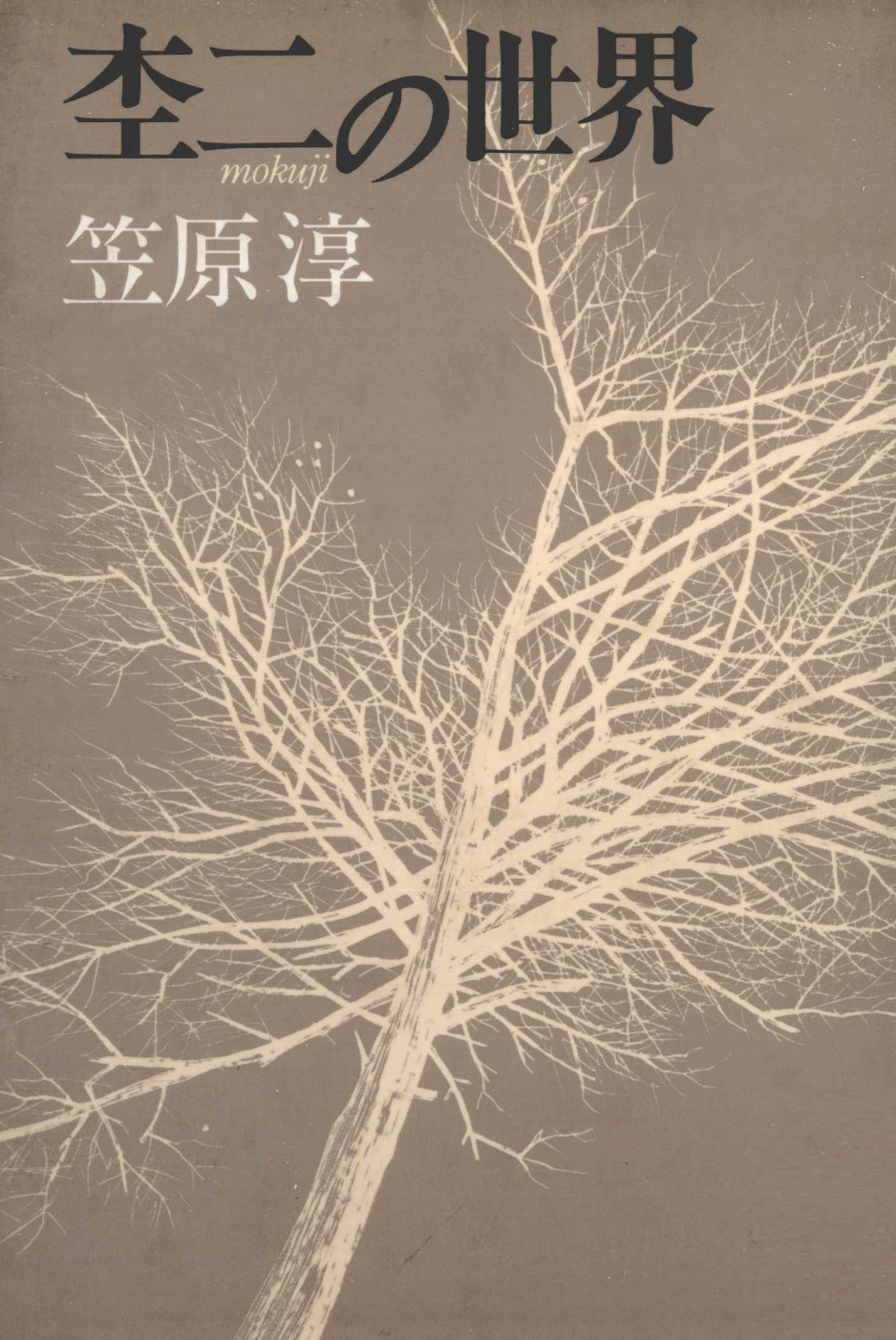


空二の世界

mokuji

笠原 淳



空二の世界

笠原淳



福武書店



笠原 淳（かさはら・じゅん）
一九三六年、神奈川県に生まれる。
法政大学経済学部中退。シナリオ研
究所、NHK脚本研究会を経て、N
HKでラジオドラマ創作、脚色等。
その間ドラマ作品「走れドン」にて
第一六回芸術祭奨励賞受賞。その後
「暴治の門出」で第一二回小説現代
新人賞受賞。「ウオークライ」で第
八回新潮新人賞受賞。「空二の世界」
で第九〇回芥川賞受賞。

本三の世界

一九八四年二月一〇日第一刷印刷
一九八四年二月一五日第一刷発行

定価一一〇〇円

著 者 笠 原 淳

発行者 福武哲彦

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南一三二八
千三三電話〇三二二二〇二二三一

振替口座（東京）六一〇五〇九七

印刷・製本 図書印刷

（落・乱丁本はお取替を致します）

本二の世界
目次

奎二の世界

7

蟹沢へ

59

歩く影

119

測量行

157

スコアブック

223

装画
丁菊
地木
信村
義茂

李二の世界

本二の世界

1

庭先に初夏の光が溢れている。

隣家との境のブロック塀に小さな蝶がとまり、淡い紫の羽をそろえて立てたまま、微動もしない。シジミ蝶だったか。捕虫網を手に走りまわった子供時分の草いきれにつつまれたような記憶の断片が脳裡をよぎった。

玄関先で妻の典子の甲高い声がした。小学三年になる息子の悟に小言を言っている。悟は日曜日の午前、近くの小学校の体育館で剣道の稽古をしてくる。なりが標準より小さいので道具が身に合わず、まだ竹刀も扱いかねているようだが、剣道を習うというのが昨今の子供仲間でのファッションの一つらしく、結構あきずに通いつづけている。

玄関から庭先にまわってくると、悟は不器用な手つきで袴の紐をとき、刺子の稽古着はそのまま下はパンツ一枚という恰好になって水道で足を洗い始めた。

「丁寧に洗うのよ、両手をつかって！」

悟の行方を追うように居間に現れた典子が声をとばしたが、生返事をして足先を交互にすり合わせている。月足らずで生まれたせいかな、いつまでも小さいと思っていたが、こうして距離を置いて眺めると、背もいくら伸びたようで、水しぶきに濡れた裸の臍のあたりはもう幼児ではなく少年らしい張りをもっている。

「ホラ、膝のうしろも！」

典子は口やかましく注意をくりかえすが、悟は遊び半分に水をはじいている。典子も口ほどではなく、ただかまいたがっているだけなのかもしれない。

悟がようやく蛇口を閉めて、しずくをふり払いながらこちらをふり向いた。ガラス戸に反射する陽光を受けて眩しそうに瞬いた眼にふっと怯んだような表情を浮かべた。それから、間が悪そうに顔を歪めると、

「……奎二さんかと思った」

と言った。

尻の辺を不意に異物でつつかれたような心地がした。兄弟だからどこか似たところがあっても

おかしくはないだろうが、李二と見紛わせるものが自分のたたずまいにあると思うのは氣詰まりなことだった。傍の典子が表情をこわばらせるのが氣配で分ったが、彼女は何も聞かなかったように台所に入ってしまった。悟は、言ってしまったからすぐ、両親に氣まずい思いをさせたことを悔いた様子で、落着かぬ風に視線をうつろわせた。

水びたしのゴムソウリを脱ぎすて、縁に上ると、濡れた足を先に脱いでおいた袴にこすりつけながら、

「ぼく、李二さん、嫌いだ」

と小声で言った。父親におもねている氣味もあった。何か応じてやらなければならない氣がした。

「どうして？」

「ぼくのこと、ブタだって言っただんだ」

「ふざけて言っただんだろう」

「ちがうよ。ぼくがエスキモーのことをバカだって言っただら……」

ようやく悟と李二の応酬について思い出した。かなり以前のことだが、李二がこの家を訪ねてくるのはそんなに頻繁ではなかったから、おおよそそのときの様子を思いかえすことが出来る。

言い出しっぱは悟の方だ。世界おもしろ辞典という雑誌のフロクみたいな小冊子をめぐりなが

ら。

「ねえ、奎二さん、エスキモーの暦って知ってる？」

と、試すような口ぶりで訊いた。叔父さんと呼ばずに名を呼ぶのは、母親の言い方を真似ている。

「エスキモーの暦は、十三月まであるんだってさ」

「ほう？」

ひとまわり以上年のはなれた末弟の奎二と悟とのやりとりを傍で見ていると、叔父と甥であるより兄弟といった感じがする。

「それでね、その月その月の呼び方が変わってるんだ。一月は、コマをまわして遊ぶ月。二月は、冷たい月。三月は……」

悟は小冊子に目を近付けて、月々の呼び名を読み上げる。

「奎二さん、どの月がいい？」

「そうだな、若いガチョウの……何て言ったっけ？」

「若いガチョウの飛び月。どうしてこの月がいい？」

「ぼくの生まれ月なんだ」

「でも、はずれてるかもしれないよ。十三月に割らなきゃならないんだから。一カ月が約二十八

日間になるわけだ。とすると、今日はエスキモーの場合、もうガチョウのくる月でなく、卯の月になるんだな」

ひとり合点をしてから、小冊子を横に放り捨てると、

「おくれてるよな、エスキモーなんて」

と言った。そこで、バカと言ったか阿呆と言ったかはっきりした記憶はない。従って、空二が悟のことをブタだと言ったかどうかとも覚えがない。いずれにしろ、悟が傷付くほどの思い入れをもって言ったことではなかったろう。空二はおよそ声を荒げたことはない。何か言うにも、ひとり言めいて歯切れの悪い口ぶりでボソボソと呟く。相手かまわずといった風でもある。

悟が奥に姿を消すと、庭先はまたひっそりとした。ブロック塀にとまっていたシジミ蝶はいつの間にかいなくなっている。透明な光の中にふっと空二を見たように思った。

「兄さん、毎日何してるの？」

距離をへだててこちらをうかがうような、まともに焦点の合わない斜視気味の目つきで訊く。他意はない。御機嫌いかが？　と言っているようなものか、さもなければ久しぶりに顔を見せた照れかくしくらいの意味だろう。そうと分っていながら、空二の言葉はへんに重たるくからまわってきて応対に窮する。波長が合わないというのか、空二との会話はなめらかに運ぶことがない。

「毎日何をしてるって……お前の方はどうなんだ？」

「ぼく？　ぼくはまあ……」

びっくりしたような顔をして、あとは薄笑いをただよわせながら要領を得ないことを呟いている。

奎二がやってくるのは、半年に一度くらいだったが、顔を見るとまず困惑の気分が生じた。はつきりした理由があるわけではなく、ただ何となく、困ったな、と思うのだ。たいていは金の無心が主な用件で来るのだが、それはさしたる額ではなく、典子の手前気兼ねはあるにしても、用立ててやることが出来さえすればむしろ気持がすっきりする。奎二の方でもこちらのそういう心理状態をよんでいたふしがある。そのために、必要もない時でさえ一応無心をしていたのではないかという気がする。

「兄さん、いくらか融通してくれない？」

どうでもいいという口ぶりである。無心をし、それに応じる、という形でつながりをたしかめていたようなものかもしれない。いったん無心をしてから、あわてたように、いいんだよ、いいんだ、と打ち消すこともあった。

奎二を迎えて困惑するというのは、金の無心にあるのではなく、どのように応対していいか距離をはかりかねるからなのだ。何かこの家に異物が入り込んだという感じで、彼がいる間中ぎくしゃくとした空気がただよう。